

鎌倉草創期の「真実」

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

本誌の以前の稿で、実朝暗殺により源氏の男子嫡流が途絶え、さらにそのあとの摂家将軍に嫁した竹御所の死亡により頼朝の血筋が絶えたとの報に接した京の藤原定家が、日誌「明月記」に「平家の遺児を悉く葬った報い」と記した旨を紹介したことがある¹⁾。書いた当時は、東国に出来た初めての武家政権を冷ややかに見ていたであろう京の公卿の「冷笑の呟き」というくらいに思っていた。しかし、今年の大河ドラマに触発された訳ではないが²⁾、当該稿のあとに、承久の変に至る鎌倉幕府草創期の権力闘争を改めて見直してみても、源氏将軍三代の実像や朝廷との関わりにつき意外な実態があったのではないかとの思いを有するに至った。その解釈、評価にはアカデミアにおいてちゃんとした議論がなされているから、ここでは歴史の新解釈などという仰々しいものではなく、いつもの無手勝流で、単に勝手に思い込んでいた素人歴史理解の幅を広げるくらいのもつりで、浮かんだ思いを巡らせてみたい。

ついでには、このあとの展開の便宜のために、当時の情勢についての「勝手に思い込んでいた歴史理解」なるものを素人的に整理して並べてみたい。「それはお前の浅はかな理解に過ぎない」とのお叱りを覚悟で書き連ねると、大凡次のようなものかと思う。

○頼朝は東国の鎌倉に武家政権を設立し、朝廷からの独立性に拘って、京とは距離を置く政治姿勢を

貫いた。その象徴として「征夷大將軍」の肩書を強く望んだ。

○頼朝は、先に京から西に覇を確立した平家に対抗して頑張った源氏の総帥源義朝の嫡男として、一貫して源氏の主流として東国を束ねた。

○頼朝の跡を継いだ頼家、実朝は「棟梁としての力量」に不足があり、政権の維持、運営に耐えられなかった。致し方なく北条による執権政治に移行した。

○北条は、頼朝旗揚げ以来最右翼の御家人として貢献し、その位置取りを利用して着々と他の御家人との権力闘争を制していった。

○尼將軍政子は、我が子の頼家、実朝を守りたかったが、実家である北条家での家内力学に抗しきれず、ついに果たせなかった。

○実朝暗殺により源氏男子嫡流の血が途絶えたため、政子は京から將軍後継を貰い受けるため慌てて工作に走った。

○朝廷は発足した武家政権を徹底して警戒し、実朝を「官打ち³⁾」など公家らしい隠微な方法で呪った。のちの「承久の変」は、源氏断絶という間隙を突いて形勢逆転を狙った朝廷の反撃であった。……などなど

これらには重なり合って因果関係をなす部分もあり、逐一順を追って「解釈の綾」を示していく手法は取らないが、ストーリー展開の全体で、以上の

1) 本誌297号「尼御台と竹御所」参照。

2) 此の稿を書いている22年3月時点では、進行中の大河ドラマがどのような展開になるかは皆目見当がつかない。年末までに三谷流のきつと面白い展開がなされるのであろうが、本稿がそれとは趣旨、趣向で相当異なっているとしてもご容赦願いたい。

3) 「官打ち」とは、不相応の高位の官位を意図的に与え、密かに本人がその重責に圧迫されて自滅するのを狙うことをいう。実朝の権大納言から左近衛大将、内大臣を経て右大臣に至るまでわずか11か月という昇進の速さは異例であり、のちの悲劇と重ねてこうした憶測を呼んだ。

「先入観」に違う角度の光を当てていきたい。

そう断わりさえすれば何でもありとばかりに、横着にもたった今書いたばかりの順をいきなり違えるように恐縮であるが、「承久の変」から始めたい。

我々の世代はこの事件をその名前で習ったから、のちに、この事変を「承久の乱」と称する説があると知って驚いたものである。元々、政治的な争乱は「～の乱」、「～の変」、「～の戦い」、「～の役」、「～の陣」などと色々な呼称が使われている。後者の三つは中立的、客観的な表現で、あえて言えば、そのうち「～の役」が対外的に構えた争乱（文禄、慶長の役など）、「～の陣」が比較的局所的な争乱（大坂冬の陣、夏の陣など）に使われている印象がある。その意味では、前二者の「乱」と「変」には中立的ではないある種の使い分けがあるように思える。一般的に言われている区別によると、「～の乱」は、国を二分するような争乱、或いは権力にある者に対する非権力者の反抗、弑逆を指し、大概是権力側に平定される場合が多いものの、それが成功すれば権力の性格や構造が根本的に変化するような争乱のことをいうとされる。一方の「～の変」は、権力にある者に非権力者が反抗するのは同じであるが、それが成功しても権力移行は起きるけれども、同じようなスキームの中で同種の第三者がとって替わるだけの争乱（単なる権力闘争）をいうとされている。「乱」の代表としての壬申の乱、島原の乱、大塩平八郎の乱などや、「変」の代表としての本能寺の変、桜田門外の変などを想起すると、一定の説得性がある。

そこで「承久の変」である。改めて言うまでもなく、承久3年（1221年）5月に起きた後鳥羽上皇率いる朝廷と北条義時率いる鎌倉武士団との大争乱であり、結果は鎌倉側の勝利に終わり、後鳥羽上皇はじめ3人の上皇が流配されるという結果になったのはご承知の通りである。しかし、それを「乱」と称す

るか「変」と称するかは、両者の権力関係をそもそもどう見るか、争乱の結果何が変わったのかの認識にかかっている。言葉を換えて言うと、戦いのあった当時の日本の「権力者」は誰であったのか、また戦いのあとその権力のスキームは構造的に変わったのか否かという問題である。

「日本には朝廷、皇室を絶対的権威とする観念があり、その結果生じた流配などの凶変には須く「変」を用いることになった」との説があるが、その説の適否はおくとしても、上記の区分に照らすとこの事変はどのように解するべきであろうか。

その問い掛けに対する答えを探るべく、他の「思い込み」の切り口からも検討してみたい。

伊豆国は、五畿七道⁴⁾のうちの東海道の一部である。交通路としての東海「道」は京と板東をつなぐ重要街道であったが、伊豆国の大部分は街道から外れた太平洋に張り出す半島である。天城山系の山が海岸に迫る地形もあって、中央政治からは隔絶していたため、所謂「政治犯」を流すには恰好の場所であった⁵⁾。この地に平治の乱で敗れた源義朝の嫡男頼朝が流されたのは、永暦元年（1160年）3月のことであった。本来は敗将の男の子は真っ先に殺される運命にあったが、勝利した平清盛の継母池禪尼がこれを憐み助命嘆願したため⁶⁾、辛うじて生き永らえ流罪となったのである。清盛にしてみれば、殺したも同然の処置と思えるほどの「隔絶した鄙」への処置であった。

鄙の地である蛭ヶ小島^{ひるがこじま}で暮らす頼朝が北条政子と知り合って……云々は有名だが、当初彼が流されたのは半島の東海岸にある伊東であったとされる。平家の家人である伊東祐継がこの地にあり、頼朝の監視役を命じられたと考えられる。ところが、祐継のあと家督を継いだ祐親の代に、その娘との間に頼朝が子をなし、父親の祐親の逆鱗に触れ「夜討ち」さ

4) 五畿七道とは、律令制における我が国の広域行政区域。五畿は大和、山城、摂津、河内、和泉の五国を指し、畿内ともいう。七道は東海道（今の関東南部から静岡、三重あたり）、東山道（都北地方から、関東北部、長野、岐阜、滋賀のあたり）、北陸道（新潟から北陸3県）、山陽道（兵庫西部から山口に至る瀬戸内）、山陰道（京都北部から島根に至る山陰）、南海道（四国、三重熊野、和歌山あたり）と西海道（九州）を言う。

5) 少し時代が下って、2代将軍頼家が幽閉されたのも伊豆修善寺。もっと下って日蓮も鎌倉批判を咎められて伊豆に流刑されている。戦国時代は北条早雲以来北条氏が支配し、江戸時代は天領、旗本領、大名に分かれた。

6) 当時の武家における後家の地位は現代人には想像できないくらいに高く、その嘆願は清盛といえども無視できないモノであった。加えて、元々義朝の母の実家は熱田大宮司家で、鳥羽上皇の後である待賢門院璋子と関係があり、待賢門院の娘である上西門院やその弟の後白河上皇を通じて池禪尼に働きかけたとされている。

え掛けられる危機が迫ったため、北条氏の拠点に近い蛭ヶ小島に逃げ移ったと言う経緯がある⁷⁾。そこから北条氏の源氏との関係が始まるのであるが、伊豆はもとより、東国にはより有力な豪族が少なからずあって、時政は娘婿の頼朝の旗揚げに真っ先に参陣したとはいえ、それ以後の頼朝麾下で存在感を維持するのは容易ではなかった。かの「石橋山の戦い（治承4年・1180年）」に時政が動員できたのは50騎程度とされる。平家の家人大庭景親の大軍と追撃してきた伊東祐親^{はとみうち}の軍とに挟撃され、頼朝軍はあ

という間に蹴散らされた。土肥実平の手引でやっとのことで真鶴岬から小舟で房総半島に逃れた頼朝であったが、その後短期間で再起を果たせたのは千葉常胤、上総広常、さらには三浦義澄らの合力に依る。いずれも上総、下総から武蔵、相模にかけての古豪であり、それぞれ千単位の軍勢を率いての参陣であった。彼らは周りの東国諸氏に対する影響力も大きかった。周辺の勢力を糾合し、有名な富士川の合戦^{たいらのこれもり}で平維盛率いる平家軍を潰走させたのは、石橋山の敗戦からわずか1ヶ月半ののちのことであった。そ



頼朝房総上陸地(千葉県銚南町竜島 現地へ赴いた日はちょうど春一番が吹き晴天で気持ちの良い日和であった。波は高かったが、対岸の三浦半島がうっすらと見え、海鳥が舞い沖には頼朝の使った舟の何万倍かの大きさのタンカーが航行していた。)



頼朝旗揚げに係る進軍図

7) 頼朝に危機を知らせたのは、祐親の次男で頼朝の身のの上に同情した祐清と言われているが、史料により異説がある。頼朝の最初の妻はこの祐清の妹で「三の妃」と記録される娘であった。「八重姫」という名であったという説があるが不明である。大層な美女であったと言われ、父祐親がことのほか溺愛していたことから、親として、また平重盛の家人という立場として、祐親は二人の関係を許せなかった。二人の仲を引き裂いて娘は他家に再嫁させ、産まれた千鶴という男子は即刻葬り去った。この辺りの事情は色々込み入っているし、祐親は同族の工藤祐経と領地をめぐる争い、嫡子祐泰が祐経の家人により命を落としたことから所謂「曾我兄弟の敵討ち」にも関係しているのだが、キリがないのでこれ以上踏み込まない。

こまでの戦闘で北条の影は薄い。当然ながら、鎌倉に凱旋する晴れの軍列でも北条氏一行は目立たぬ後段である⁸⁾。その時点では、頼朝の御家人衆の中で北条はまさに「馬群に沈んで」いる状態であった。後世の印象からすると意外であるが、そうした御家人の間における北条氏の位置は、頼朝の妻の実家という以上には格別の事はなく、頼朝存命中を通じそれほど変わりがない。

さても、富士川合戦により頼朝は鎌倉で初めての武家政権の基盤を確立するのであるが、注目すべきことが三つある。ひとつは富士川の合戦のあと潰走する平氏を追撃せず、兵をまとめて鎌倉に戻ったこと。富士川での戦いというのは「合戦」とは言っても、元々追討に派遣された平家軍の士気は低く、頼朝軍の意外に大きな動員数を目の当たりにして早い段階から離脱が多かった。周到に川の支流に迂回するつもりで頼朝先鋒軍がたまたま水鳥を刺激して「驚いた水鳥の羽音」で平氏軍が勝手に浮き足立って退却を始め、戦闘らしい戦闘はないままに終わってしまった。満を待っていた頼朝軍は「暖簾に腕押し、肩透かし」状態となり、頼朝も勢いに乗じて追撃を命じたほどであった。これを押し留めたのが、千葉、上総、三浦の地元一族の面々であった。彼らにしてみれば、幸運な戦勝の因に乗って西に進軍してみても得るものはない、むしろ常陸の佐竹氏などに背後を突かれては元も子もないとの思いが強かったのである。その心情を瞬時に理解し、追撃を思いとどまった頼朝の見識も優れていた。そこで二つ目の注目点につながるのであるが、頼朝は鎌倉に腰を落ち着けるや⁹⁾、彼らの本領を安堵し、平氏の所領を分け与え、土地を媒介にした主従関係を確立したのである。「御恩を貰い、奉公すべき対象が鎌倉におられる」ということで、頼朝は「鎌倉殿」になったのである。

そして、三番目の点であるが、早速に朝廷工作をしたということである。頼朝は鎌倉に割拠し独立独居の勢力を作り、そのまま維持可能であるとは最初から思っていなかった。やや議論が飛躍するが、ここでは所謂「権門国家論」と「東国国家論」における認識の差を問題にしている。大雑把に分かり易く言うと、新興勢力の武士団が、既存の世界の一部として全体に組み込まれているのか、独立の存在なのかという議論である。武家社会の端緒を開いた彼らについては、特別な歴史的意義をまとったオーラを認めたくはなるが、「承久の変」以降はともかく、その当初において、曲りなりにも律令政治の下の摂関政治の色が残る世界にあって、新興勢力の武士たちが、天皇又は上皇を頂点とする秩序を前提にしない発想をしたとは考えられない。

頼朝は流人の身で官位官職は剥奪の身であったが、富士川の合戦以後の東国での実効支配の事実を後白河法皇に訴えて、元の官位の「従五位下」に復帰している（寿永2年）。このあとにもたびたび触れるが、頼朝は官位官職には格別の執着を示している。この政治感覚は彼が元々京に起源を持つ武士公卿たる所以である。因みに、源義朝も平清盛も朝廷を警護する「北面の武士」出身である。

先に、房総に逃れた頼朝の短期間での反攻について触れた。流人の身で旗揚げしたものの鎧袖一触され^{いっぽつではわかえ}、これだけの体で落ち延びてきた頼朝なのに、何故に房総の地の有力者に受け入れられたのかの秘密の一端もここにある。後世の史家は武家政権の独立性を強調するあまり武士の官位官職への憧憬を無視しがちであるが、「実力」でもって支配の実効性を確立した武士は、実力が腕力にもものを言わせたものであればあるほど律令制度の中での名目・名分を欲しがった¹⁰⁾。しかも「従五位下」は「公卿」の資格であり、東国の荒くれ者にとってはとてつもない高位である。若くしてその地位にある者は紛れもない「貴種」であっ

8) 鎌倉への凱旋軍列の先駆けは畠山重忠、頼朝に供奉する右翼は千葉常胤であった。

9) 鎌倉の地は、相模湾に南を接し、他の三方を丘で囲まれた防御に適した地勢で、新興勢力が拠るには適したところであり、11世紀前半に源頼義が居を構えて以来、義家、義朝(頼朝の父)、義平(頼朝の兄)などが住んで、源氏にとっては所縁(ゆかり)の地でもあった。

10) 官位官職への憧憬は、例えば和田義盛のような武骨一辺倒な古老にあって、大層特別のモノであった。和田義盛といえば、侍所の別当として重きをなした武人であり、御家人中の御家人である。少し時代が下るが、その彼が將軍実朝に懇願を繰り返したのが上総国司(又は介)の地位であった。しかし、国司は朝廷権威を直接代理するものであり、朝廷そのものであるともいえる地位である。しかもランクこそ違っても朝廷から任せられるという意味で征夷大將軍の実朝とは天皇の下で同輩ということの政治的意味は悩ましいものであった。実朝は悩みながらも朝廷と折衝し、最終的に和田の遠縁にあたる藤原秀康を上総介に任じるよう差配してこの件を収めている。義盛としては「一生の余執」が果たせず無念であったが、当時の御家人心情を如実に表す事案である。もっとも、もう少し時代が下ると、のちの本文でも紹介するように、御家人であるが朝廷に近づき勝手に国司になる武士も散見されるようになる。

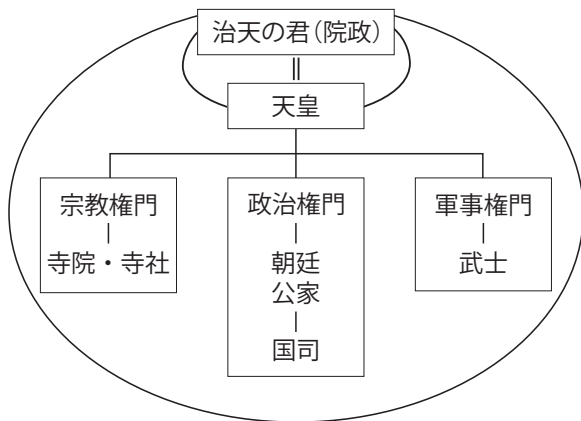
た。鄙^{いな}にあって「朝廷の何たるかも分からない武士」というのは後世の偏見。勃興する武士団を朝廷の対極にあるものと考えがちだが、綻びが目立つとは言っても歴^{れき}とした律令制度の下にある平安末期の権力の認識構造は図のようなモノではなかっただろうか。朝廷は畏、崇^{あがめる}拝の対象であったし、敬愛的でもあった。こうした秩序の中にある貴種に沿うことは、自らの存在意義を高め、他の同輩への優位性の発露^{しるし}の意味でも価値があった。

頼朝もそのような世界観、秩序認識のもとで、武士集団の位置取りを構想し、朝廷との関係維持に腐心した。加えて、長女の大姫^{じゅだい}の入内を画策し、大姫の死によってその目論見^{つひ}が潰えた後も、次女の三幡にその思いを託す行動をとっている。結局その目論見^{うまくいか}はいずれも成就しなかったのであるが¹¹⁾、摂関政治の残影が依然色濃く残る世界で、あわよくば自身が朝廷の外戚^{これっぽち}となって中央政界に地歩を得るという発想が微塵もなかったとまでは言わないが、朝廷の権威を使って新興勢力としての武士団の地位の確定、安定化を目指すのが第一義であっただろう。後世の「武家の棟梁・武家政権」のイメージ^{そく}に似わな

い面があるが、頼朝にあっては、朝廷とはそのような存在、対象と映っていたのではないだろうか。

官位官職に話が及んだので、頼朝の「征夷大將軍」任官にも触れておきたい。この役職は令外官^{りょうげのかん}で、奥州の平定のため必要に応じて臨時に置かれたものである。時間を早送りするが、奥州の藤原氏を滅ぼし文字通り東国を平定して上洛した頼朝は、権大納言、右近衛大將に任じられた。しかし、任官間もない時期にこれらを辞したため、そのような中央の官職ではなく、東国での覇権を象徴し、権力を行使できる「征夷大將軍」の地位を熱望していたとの説がある。京との距離を置き独立権力行使の志向を強調する「東国国家論」の趣旨にも沿った説である。他方、彼が望んだのは、自らの家系の先祖である源頼義や義家が任官し、平泉で栄華を誇った藤原秀衡もその地位にあった「鎮守府將軍」を更に超える地位^{タイトル}であったとする説がある。つまり「將軍ではなく『大』將軍」が欲しかったというわけである。当時の公卿の日誌¹²⁾などにその旨の記述があり、朝廷において「大將軍」の頭に冠する称号として「征東」、「征夷」、「惣官」、「上」の四つを検討したとある。結局、「上將軍」は例がなく、「征東」は木曾義仲、「惣官」は平宗盛という滅んだ武將の不吉な例があるということで、消去法で「征夷」が選ばれたとしている。坂上田村麻呂¹³⁾の吉例^{ひそみ}の襲^{ひそみ}に叶うものでもあった。勿論、その選定過程に拘わらず、頼朝に異存があろうはずはなく、以来、武家政権の長としてその名称が定着していく。併せてかなりの人数の御家人が官職に任官¹⁴⁾し、この後も御家人への朝廷からの除目は続くのであるが、頼朝は任官に際しては自らの推挙を義務とすることを定めた¹⁵⁾。

なお、上記の権大納言、右近衛大將に除目された



当時の「世界観」図

- 11) 大姫と三幡の参内の工作は、結果的に二人の病死により成就しなかったのだが、京の政治力学に翻弄された面もあった。頼朝が頼ったのは関白九条兼実との政争に勝った村上源氏の源通親である。ところが、通親が後鳥羽帝の内裏に入れていた娘在子が皇子(のちの土御門天皇)を得たため、これと競合する大姫の参内を喜ばず、三幡についても後鳥羽帝の譲位を急がせた通親の思惑でやはり成就しなかった。なお、九条兼実には「玉葉」という優れた日誌があり、本稿でもいくつか参考にさせてもらった。
- 12) 内大臣中山忠親の日誌「山槐記」、藤原資季の日記「荒涼記」を抜粋した桜井陽子「山槐荒涼抜書要(ぬきがきのかなめ)」による。
- 13) 征夷大將軍としては坂上田村麻呂が有名であるが、その前任の大伴弟麻呂がその最初である。征東將軍、持節征東將軍などの名称が使われたこともあるようである。
- 14) 左衛門尉(さえものじょう)に和田義盛、三浦義連、足立遠元が、右衛門尉(うえものじょう)に、比企能員、小山朝正が、左兵衛尉(さひょうえのじょう)千葉常茂、梶原景茂、八田知重が、右兵衛尉に三浦義村がそれぞれ任じられ、面目を施したとある。これらは、京における武人職で従六位下くらいの官職である。因みに、頼朝の権大納言は正三位である。
- 15) このルールに反して頼朝から誅伐されたのが、頼朝に無断で京で検非違使に任ぜられた義経である。史説では鎌倉の京権力からの独立性維持に腐心する頼朝の神経を逆撫でしたとするものが多いが、ただそれだけなら「説論」すれば済む話である。富士川の合戦後、感激の対面を果たした実の弟であり、平家討伐の最大の功労者である彼をいきなり追放するというのは、それ以上に背景があると思うべきである。

折、頼朝は後白河法皇により大功田として百町を与える旨の宣旨を受けている。その政治的な意味には注目している。もっとも、幕府の正式記録である「吾妻鏡」には寸毫も記述がない。吾妻鏡の記述の偏向についてはこの後にも触れるが、頼朝が朝廷から土地を付与される存在だったとは書き残したくない編纂意図があったように思える。

さて、源氏三代の将軍のうち頼朝と頼家の最期にまつわる経緯には不可思議な要素が多い。建久10年(1199年)まだ51才の頼朝が落馬が原因で急死し、嫡男頼家が後を継いだのであるが、その頼家も建仁3年(1203年)突然病に倒れ、危篤に陥るといふ事態が生じる。

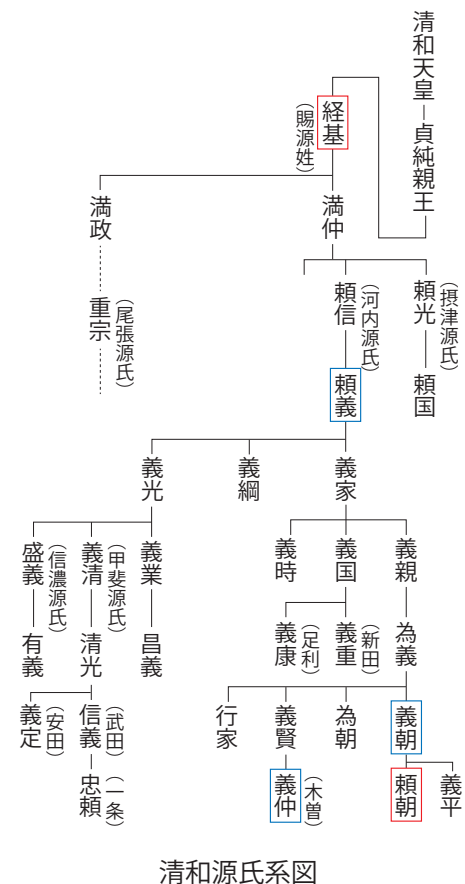
頼朝の最期については、「御家人稲毛重成が亡妻(時政の娘で義時、政子の妹)の供養に建立した橋の落成供養に参列した帰途「落馬」し、それが原因で病を發し行程も経ずに薨じた。」と「尊卑分脈¹⁶⁾」に記録がある。吾妻鏡にも同様な記述があるにはあるが、何故か随分と年月の経った後の記載である。創設者であり一大権力者の突然の死が鎌倉にパニックを起こしたであろうことは想像に難くない。実は吾妻鏡には頼朝の死の前3年ほどの公式記録が抜け落ちている。或いは消されたかも知れないのだが、混乱の証左である¹⁷⁾。

一方、頼家の危篤については病名も症状も吾妻鏡は何も記していない。重要なことは、危篤になるや、「将軍はもはや快復しない」という前提で政局が急展開したことである。頼家の嫡男一幡と弟の実朝とに領国を二分して分け与えるという裁定が瞬く間になされた。そして、それを巡って「比企の乱」という頼家の妻の一族を滅ぼす一大事件が生じ、その後奇跡的に快復し、事件の真相を知った頼家が激怒したのを「粗暴・専横を極めた」として伊豆修善寺に追放してしまうのである。病が篤くなったとはいえ将軍存命

のうちに「次の治世構造を決める」ことの異常さは否めず、しかもその領国分配に絡めて詐術的な策動¹⁸⁾を弄し一挙に比企一族を謀殺するということには、明らかに北条一族の謀略がある。「比企の乱」というより「北条の乱(変?)」であった。

この策謀には、二つの疑問がある。ひとつは北条時政はなぜ頼家直系の公暁ではなく、頼家の弟実朝を担いだかということ。もう一つは一連の判断において政子はどのような立場にあったのかということ。

ちょっと迂遠かも知れないが、頼朝の源氏における立ち位置から整理したい。石橋山の旗揚げから富士川の合戦あたりの治承・寿永年間の時期には、源氏といっても「有力筋が沢山あった」。清和天皇の孫の経基が源氏姓を賜り清和源氏が始まるが、頼朝



清和源氏系図

16) 「尊卑分脈」とは、別名「諸家大系図」とも呼ばれる鎌倉期以前の姓氏体系図。南北朝時代頃の編纂と言われ、源平藤橘はじめ平安から鎌倉時代の氏族を知るに貴重な資料。基本的に男子家系図だが、主な人には生母、官歴、死亡時期などが付記され、本稿の随所で利用させてもらった便利な資料。

17) 頼朝の死については、源義経、源行家、さては安徳天皇の亡霊に祟られて正気を失ったというような説もあるが、それらはともかく、京の公卿の日誌の中に「飲水の病」とよるという記述もある。死因は依然として不明であるが、落馬のことも含め、英雄の死因としては見栄えが良くない(カッコよくない)ため、吾妻鏡なども記録が遅れたり、詳細を残さなかったのであろう。

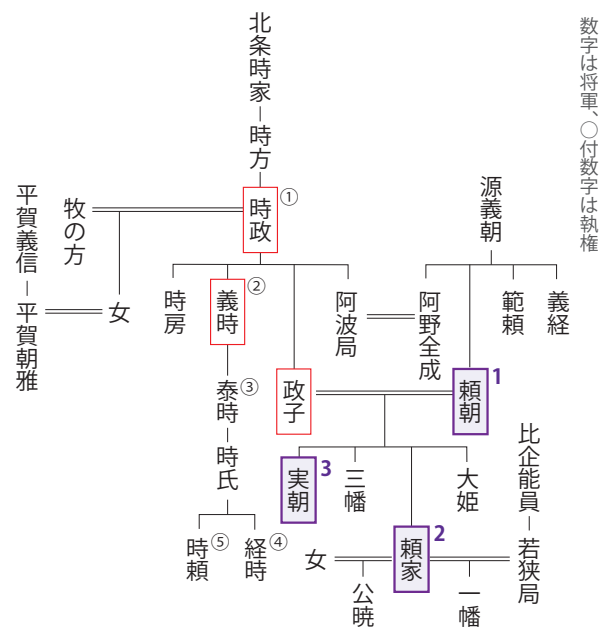
18) 頼家人事不詳の間に急遽裁断された領国の分割案は、「関東38ヶ国を一幡に、関西28ヶ国を実朝に与える」というものであった。吾妻鏡は、分割案を不満とする比企能員が病床の頼家に北条討伐を咬いたのを、政子が立ち聞きして時政に急報し、時政が直ちに兵を起こし先制的に比企氏を討ったとしている。一方、愚管抄(慈円著)は、分割案に不満のない能員が社交のつもりで時政屋敷を訪ねて騙し討ちにあったとしている。

に繋がる河内源氏の他に摂津源氏、尾張源氏があり、河内源氏の流れにも頼義、義家の系列に新田義重、足利義康もあり、甲斐源氏の武田信義、安田義定や信濃源氏などもあった。そして、河内源氏には真っ先に「京で名を上げた」木曾義仲もいた。こうした「潜在的同族ライバル」の中で頼朝が注力したのは、武力制覇実績の積み上げと「鎌倉殿」の権威高揚であった。頼朝は弟の範頼、義経を京、西国に派遣し、義仲を近江粟津に破り、続いて一の谷、屋島、壇ノ浦と転戦させて平家を滅亡に至らしめた。前後して、平家討伐では歩調を合わせたものの、朝廷側からの懐柔策に靡いて頼朝への対抗勢力に擬された甲斐源氏的一条忠頼も討った。更に奥州藤原氏を滅ぼすと陸奥から出羽をも平定して凱旋した。その凱旋の折、前九年の役において源頼義がなした敵将梟首の前例¹⁹⁾に倣って藤原泰衡の首を晒し、自らこそが鎮守府將軍頼義の正当な後継者であることを演出している。徐々に源氏の正統性、唯一の武家の棟梁「鎌倉殿」の浸透が図られた。更に、「頼朝の嫡流」こそが鎌倉殿たるに相応しいことを周囲に示し浸透させていった。範頼、義経は弟であっても同族というより頼朝の配下として扱われた上、平家討伐が終わると排除されている。二人の悲劇的最期²⁰⁾はそうした本家嫡流戦略と無縁ではなからう。

その意味で、頼朝が嫡男頼家を後継に想うのは当然であり、その嫡流の一幡にそのまた後継が繋がるのは自然に想定していたであろう。だが、頼朝の死が早すぎ、突然すぎた。権力の空白が生まれ、吾妻鏡の記述が遡って空白になるような混乱があったとしてもおかしくはない。ここからは想像の域を出ないが、頼朝が直系孫の一幡を祝福するような公式の慶事やそれを公にする沙汰なども、この空白の期間に行われた筈である。直系でない実朝を担いでのちに

権力を確立した北条家にすれば、そのようなことがあったと記録に残すようなことは避けたかったのではなからうか。

先の疑問に戻ろう。前にも記したが、頼朝存命中に北条氏が御家人の中で格別に重きをなしたとの様子はない。しかし、頼朝の突然の死は権力の空白を生み、御家人間の力関係の軋みに拍車がかかった。北条氏は「ベタの御家人」の存在から徐々に存在感を増しつつあった。比企の乱の事件のころには既に畠山重忠が討たれ、このあと和田一族の滅亡（和田合戦²¹⁾）に至るまで紆余曲折が残ってはいたが、北条氏にとって、この時点での比企一族の排除は、一連の御家人間勢力争いの中で重要なステップであった。比企氏を排除する以上、一幡は当然の殲滅対象であり、嫡系相続を志向する頼朝の意向がどうであれ、



源氏と北条氏関係系図

- 19) 「大路渡(おおじわたり)」といい、討伐した敵将の首を都の市中を引き回した後、獄門の木に掛ける儀式のことである。前九年の役の際に源頼義により、安倍貞任の首をそのように扱い、武名を上げた顰(ひそみ)に倣っている。
- 20) 源平合戦の最大のヒーロー義経が、頼朝に追われ平泉衣川で最期を遂げた話は有名であるが、範頼について附言しておきたい。範頼は専横、横着の嫌いのあった義経に比べても、頼朝への同い、連絡を怠らない「優等生」であった。しかし、曾我兄弟の事件に際し頼朝死亡の誤報が伝わり、「まだ範頼が控えております」と兄嫁の政子に伝えたことで謀反の疑いをかけられ、修善寺に追放となってしまった。その後の正式な記録がないが、誅殺されたとされている。なお、「頼朝の嫡流確立」という観点からは、阿野全成の乱もその一環であろう。全成も頼朝の実弟であり、政子の妹(阿波局)を娶っている。身内の筈であるが、謀反の疑いをかけられ討伐されている。
- 21) 和田合戦(建暦3年/1213年)とは、鎌倉の御家人同士の勢力争いの最大のものである。北条が徐々に存在感を増す中であっても、和田義盛は侍所の別当を務め、また三浦一門の総師として武人の第一人者の地位を維持していた。しかし、信濃国の泉親平という御家人が北条義時打倒の兵をあげ、それ自体は未然に防がれたのだが、泉の計画に和田の関係者が少なからず加担していたことからその処断を巡り北条、和田の全面衝突に発展した。際どい攻防であったが結局將軍御所にあった実朝の身柄を確保した北条側の勝利となり、北条氏のヘゲモニーが確立した。本件はあくまでも御家人同士の確執であり、和田一族は將軍実朝に異心はなく、義盛の息子朝盛などは実朝側近として長く仕えて共に和歌に親しみ、最後まで実朝との関係に未練を残した。なお、三浦義村は早くから北条に内通したとされ、「三浦犬は友をも喰らうわ(千葉胤綱)」と揶揄されるような処世術を弄し、のちの実朝暗殺でも頼って逃げ込んできた公暁を北条の指示で殺害した。

その嫡系ではなく政子の妹（阿波局）が乳母を務めた実朝を擁立することが北条氏にとっての最良な方策として選ばれたのである。一幡の弟公暁は、北条から見ると自らとの結びつきの薄さ、頼家との関係の濃さの二重の意味で「選択肢外」だったのである。

一方、政子にとっては、頼朝の妻、頼家、実朝の母、一幡の祖母という立場と、北条一族の時政の娘、義時の姉としての立場とが、この間ずっと相剋していたであろう。しかし、あえて結論的に言えば、頼家病臥に際し後者の立場を意図的に優先したように映る。最大の立役者の急死で混乱した政権内では色々な策動があっただけでなく、頼家將軍のもとで後述のように「13人の合議制」が導入されるのであるが、そこで北条氏は時政と義時がそれに加わる。想像の域を出ないが、頼朝の死を機会にその後の政局で北条側が「馬群」から抜け出て御家人の中で主導権を握るために、時期を見て比企氏を追い落とし、実朝を擁立するというシナリオが用意された可能性が高いのではなからうか。政子にすれば、頼家の病状が悲観的であるならば、頼朝の目指した嫡系継承志向には違背するが、残る我が子の実朝と幼い孫一幡に実権が繋がるなら許容範囲であり、実家の隆盛に役立つ戦略には協力しようと考えたのではなからうか。そうとでも考えないと、まだ病臥しただけの頼家の後継問題の急展開に異論を唱えなかった理由が思い付かない。頼家や一幡が結果的にあれほどの悲劇的な末路²²⁾を辿るとは想定していなかったであろうが、しかし、頼家の失脚までは割り切り済みだったのではなからうか。

しかし、彼女にとって実朝の暗殺や公暁の誅殺は到底受け止められるものではなかった。元々公暁を早々と出家させたのは頼朝の嫡系継承方針に即したものであったが、政子はそれなりに孫の公暁には心遣

いをし、仏門修行に当たり鶴岡八幡宮の別当定暁の下で得度させたり、園城寺に口を利いたりしている。ところが、たまたま園城寺で世話を頼んだ明王院僧正公胤^{こういん}が亡くなり、また期を同じくして鶴岡八幡宮の別当定暁が死去してその席が空いたため、政子の差配で公暁を招致することとなった。仮にそのような高僧の相次ぐ死の巡り合わせがなく、公暁がもう少し園城寺での修行を続けていれば、あの暗殺劇はなかった。政子の胸の内はどうであったか。黄泉の国で頼朝にどう説明したのだろうか。

勿論、そうでなくとも、北条氏の謀略は別の形で源氏に取って代わるべく動いたかも知れない。しかし、改めて一連の過程を辿ると、公暁²³⁾のこの場での登場はいかにもイレギュラーである。繰り返したが、仮にあの時点で公暁が鎌倉に居なければ……と思わざるをえない。暗殺については、前後の義時の振る舞いなど色々興味の尽きない仮説があり、結局において北条氏に利する結果となったため北条黒幕説が有力のようだが、筆者の個人的印象としては、犯行は公暁私怨単独犯に近い感じがする。

話を急ぎ過ぎた。改めて、頼朝を継いだ頼家と実朝は、將軍として実際にはどのような存在であったのかを確認しておきたい。

これまでたびたび引用してきた「吾妻鏡」というのは、治承4年（1180年）から文永3年（1266年）に亘る6代の將軍の期間をカバーする鎌倉幕府の公式記録であるが、13世紀の終盤、恐らく8代執権時宗、9代執権時貞のころに編纂されたものである。編纂の時期といい、得宗家として権力が確立した宗家北条氏の下で作成されたことといい、かねて「北条氏に都合のよい隠蔽、歪曲」が噂されるものである。

よって、頼家、実朝の二人にも甚だ芳しからざる記

22) 「比企の乱」の際、能員を自邸に誘き寄せて討った時政はすぐさま比企の谷の館を襲い、若狭局はじめ一族を滅ぼした。幼い一幡は一旦は館から逃れたはしたものの、探し出されて義時の命で殺害された。一方、修善寺に追放された頼家も、最終的に密かに送られた刺客に襲われ格闘の末に無残な形で惨殺された。

23) 公暁は、元々の自らの境遇に恨みを覚えていたと考えられる。鎌倉に呼び戻されたものの、別当としての職務もなおざりに千日参りの祈祷に入っていた。頼家を呪い殺すことを念願していたとされているが、そのさなかに親王の將軍招請の計画話に接し、「祈祷などやっている場合でない」と焦り、凶行に及んだとされる。將軍家氏神の別当が、自らの境内での右大臣就任奉奏という將軍慶事に際し階段下の大銀杏の陰から躍り出て、列に居並ぶ要人の前で公然と蛮行を完遂したというのは驚きである。また、「親の仇はこのように討つぞ」と大音声を上げるという設定も如何にも時代掛かっているが、「親の仇討ち」は権力者の暗殺をも正当化すると考えるメンタリティは興味深い。曾我兄弟の敵討ちの風土が重なる。

頼家の息子は、一幡を嫡子、公暁を次男としている。生母について若干の異説があるものの、少なくとも豪傑源為朝の孫娘である賀茂重長の娘を正妻生母とする公暁の方が、比企氏能員の娘を妾生母とする一幡より嫡出息として格が上であるとされている。頼家が比企氏を乳母とし比企屋敷で育ち、そこから妻をも迎えた比企氏を後ろ盾としたため自然に一幡が嫡子扱いとなったのだが、微妙なところである。

述が目立つ。頼家については、若気の至りで専横の癖があり、蹴鞠などに打ち興じ政務を怠り、遂に親政を止められ、「宿老13人の御家人による合議制²⁴⁾」が導入されたとしている。しかし、「13人の合議制」といっても、将軍から裁可権能を取り上げて、代わりに13人が専議決定するというのでは決してなく、将軍に上申する案件は13人以外からは上げないという仕組みである。13人は発足してすぐに3人が欠けたし、最初から全員が集まって協議した形跡は皆無である。将軍頼家は13人からの上申を聴聞し、肅々と関東下し文（決定通知書）を発給している。また、蹴鞠というのは単なる遊戯ではなく、当時の為政者の文化的に不可欠な素養の一つであり、こと更に糾弾すべきものではなかった。

実朝に至っては、和歌に耽溺したことを殊更に槍玉に挙げられているが、畢生の歌人でもあり権力者であった後鳥羽上皇や朝廷とのやり取りをするためにも必須の素養であった。加えて、何故か忘れられがちであるが、創設将軍頼朝が和歌に通じ、新古今和歌集にも句が載るほどであり²⁵⁾、実朝の和歌への関心が頼朝の句によって触発されたという説もあるのに、頼朝に対しては崇める傾向のある吾妻鏡がそうした経緯を無視するが如きの記載をするのは矛盾である。

頼家の治世は短かったが、実朝の治世は15年以上に亘っており、これはそれなりの期間である。特に問題となるような失政もなく²⁶⁾、吾妻鏡のねっとりした

記述に拘らず、安定した政権運営であった。実朝は従三位に昇任し政所で親政を始めた。それを、北条氏の正統を継いだ義時²⁷⁾らの武人、大江広元、三善康信らの事務方がしっかりと支えての治世であった。北条氏が「比企の乱」を画策し擁立した実朝政権は、将軍を中心に一定の安定した推移を辿ったように見える。のちに彼が暗殺された折、衝撃のあまり出家した御家人は7~80人に及んだと言われ²⁸⁾、将軍実朝が尊ばれ親しまれていた様子が窺い知れる。

在任中、朝廷との関係も平穏であった。当時の後鳥羽上皇を治天の君とする朝廷と「鎌倉殿」との間に象徴的なことがあった。実朝は後鳥羽上皇の近臣坊門信清の娘²⁹⁾を娶り、二人の仲は大層良かったとされている。しかし、二人の間に子がなく、実朝は側室を置かなかった。武家の棟梁に後継猶子がないというのは由々しきことである。巷間実朝の死に慌てた政子が事件後に朝廷に工作して摂関家から猶子を貰い受けることに奔走したとのイメージがあるが、それは誤りである。既に実朝存命中の建保6年（1218年）には後鳥羽上皇に親王を将軍に推戴する希望を伝え、熊野詣を口実に上洛した政子と後鳥羽上皇の乳母卿二位藤原兼子との間で折衝が行われている。結果、坊門局が生み卿二位が養育する頼仁親王と、修明門院重子が産み順徳天皇の弟に当たる雅成親王のいずれかを鎌倉に下らせると

24) 「合議にあたる13人」とは、次の者を言う。このうち最初の4人が所謂京から連れてきた文官、それ以外が御家人である。また、梶原景時が早々に謀反の疑いで失脚、誅殺され（正治2年/1200年）、安達盛長と三浦義澄が病死して、「13人の実態」は早々に崩れた。「大江広元、中原親能（広元の兄）、二階堂行政、三善康信、梶原景時、三浦義澄、八田知家、安達盛長、和田義盛、比企能員、足立遠元、北条時政、北条義時（時政の息子）」。

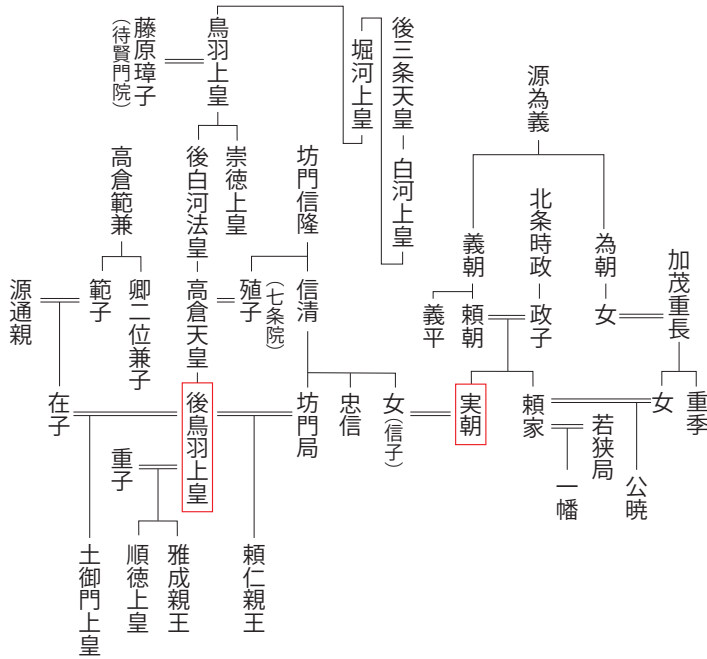
25) 実朝の和歌は有名だが、頼朝も当時の京出身の政治家として当然のように和歌に親しんでいる。新古今和歌集には、次の2首が収められている。「道すがら富士の煙もわかざりき晴るまもなき空のけしきに」、「陸奥のいわではしのぶはえぞしらぬふみつくしてよ壺の石ぶみ」。前者は比較的ストレートな抒情句であるが、後者は掛詞が多用された巧句で、「いわではしのぶ」には陸奥にある「岩手」と「信夫」の地名が読み込まれ、「えぞしらぬ」には「蝦夷」が、「壺のいしぶみ」には「碑（いしぶみ）」、「文」と「踏み」が掛けられている。

26) 実朝失政の代表のように言われるものに「謎の渡宋計画」がある。これは、東大寺大仏再建の技術者で来ていた和卿という宋人の「夢」に出たという前世における和卿と実朝の縁起（えにしばなし）に端を発して、由比ガ浜で宋に渡航する大船を建造させたという事案である。陸で出来上がった船は結局進水に失敗し、浜で無残な残骸を晒す結果となった。吾妻鏡はこれを実朝評価に水を差すべく冷ややかに記述している。確かに、技術的に遠浅の地形も苦慮に入れなくて船だけ造った事情はお粗末だし、費用の無駄にもなったのは事実だが、この事業の奉行は義時が務めており、これを失政だというなら北条氏も連座である。

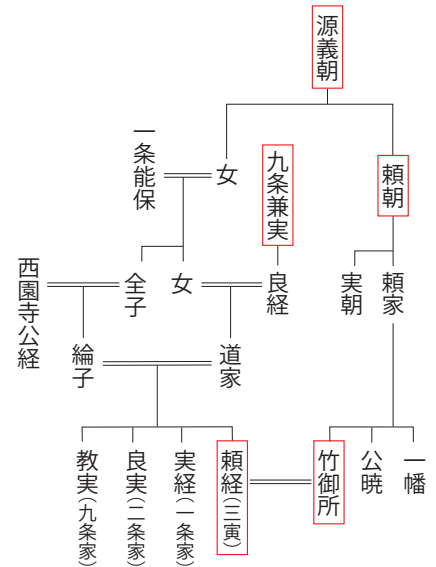
27) 論旨がややこしくなるので本文では省略したが、ここに至る間に義時は父時政を「失脚」させている。詳細経緯を省略するが、功臣畠山重忠排除に絡んで、彼と親交のあった義時らとの間に隙間風を感知した北条時政は、実朝を廃して後妻の「牧の方」の連れ子である娘の婿である平賀朝雅を将軍にし、自らはその後見として権力維持を図るという策謀に走った。時政は、和田一族を討って政所と侍所の別当を兼ね北条の執権政治を確立した功労者であったが、さすがに驕りにすぎて血迷ったか。平賀朝雅は源氏の血を引いており、頼朝嫡系でない実朝を担いだ時政にしてみれば、大した違いはないと思ったのかもしれない。しかし、頼朝の後家の政子とその弟義時の「北条本流」にしてみれば、到底受け入れられるものではなかった。元久2年（1205年）時政、牧の方は鎌倉を追放され、京にあった平賀朝雅も誅殺されている。「牧氏事件」と言われるが、むしろ「北条時政事件」である。

28) 創設将軍頼朝が死去した際でも、出家したのは安達盛長など数人であったと言われ、御家人のセンチメントにも相当差があった。

29) 名前を信子とする史料もあるが、定かではない。父信清は後鳥羽上皇の生母七条院殖子の弟であり、信子は後鳥羽上皇の従兄妹にあたる。よって、後鳥羽上皇と実朝も「従兄弟 in law」である。佐藤季の「言の葉は、残りて」は、実朝と信子との情愛を和歌を通してロマンチックに描いたもの。



後鳥羽上皇と源実朝関係系図



九条家と源氏関係系図

いうところまで話が煮詰まっていた事実がある。実朝自身や鎌倉首脳の中でも、親王を戴いて然るべき女性を娶わせて將軍とし、実朝がそれを後見するという体制が構想されていたのである。実朝は上皇に連なる公家の娘を妻とし、自らは既に頼朝を凌駕する内大臣、右大臣の沙汰を受けて身分は最高位公卿に並んでおり、新將軍を庇護し後援するには不足はなく、逆に親王くらいの人でないと將軍に相応しくないという相場感であったのかもしれない。

もっとも、そのような発想が鎌倉の御家人たちの心情にどう映ったかという点は微妙で、「武家の棟梁」に馴染まない、公家風習に抛り過ぎであるというセンチメントがなかったとは言えない。それが廻りまわって公暁の犯行を後押ししたとする説もある。

一方、朝廷側でも、そうした申し出は「武士勢力」との折り合い確保、牽制の意味からも歓迎すべきものであったであろう。治天の君である後鳥羽上皇にすれば、武力勢力の政治的意義に目醒め、のちに述べるように、京に在勤する御家人を懐柔したり、西面の武士を編成したりもしていたのであるが、政治縁組により勞せずして「治天」の一翼に武士勢力を率いる將軍を組み込める申し出は優れて望ましく映ったであろう。その意味で、この構想は win-win

の提案であった。実朝の官位が急速に高まったのも、親王の後ろ盾として相応しい身分に押し上げるための朝廷側の好意的な配慮であったとみるべきである。

しかし、実朝暗殺はすべての思惑を粉碎してしまった。後鳥羽上皇にしても、「そんな危ない境遇」の將軍の座に皇族を出すわけにはいかないし、そもそもこの構想は格別のシンパシーの共有があり朝廷を崇拜する実朝が將軍後見をすることに格別の意味があり、肝心の彼なくしては成り立たないのである。親王將軍は沙汰止みとなってしまふ。そのあと政子は御家人の連署した懇請状を添えるなどして改めて京からの後継獲得に手を尽くしたが、親王の東下は叶わず、実現したのは「摂関將軍³⁰⁾」であった。

それにしても、ここで登場する後鳥羽上皇とはどんな人物であったのか。彼が稀に見る実力者とされたのは、その胆力や新古今和歌集をほとんど一人で編纂するほどの和歌の教養もさることながら、究極的にはその経済力に力の源泉があった。莊園支配で摂関政治の頂点を極めたのは藤原道長、頼通の時代であるが、彼らが栄華を謳歌できたのは、支配する莊園の多さと天皇の外戚であるという事実であった。ただ、それは事実上のもので制度上の根拠は何もなかつ

30) この時鎌倉に送られたのは、左大臣九条道家の三男の三寅。道家は頼朝の妹の孫にあたり、源氏との所縁のある人物である。三寅が元服して第4代將軍頼經となり、頼家の娘「竹の御所」と結婚するのだが、その顛末は冒頭引用の旧稿に譲る。摂家將軍から親王將軍となるのは、第6代將軍からである。

た。頼通時代の後半に久方ぶりに藤原氏出身でない娘を母にする後三条天皇³¹⁾が即位するや、事態は一変した。後三条天皇はある種の親政を行い、特に未整理の荘園の整理を行ったことで知られる。この未整理の荘園というのは、正式に寄進などの手続きをしないで事実上律令スキームから逃れていた幽霊荘園のことで、それを後三条天皇は取り上げてしまったのである。そうした荘園が藤原氏に多かったことは、この整理令により藤原氏の荘園が1/3にまで減ってしまったことでもわかる。元々システムとしての根柢のない摂関政治は、後三条天皇が息子の白河天皇に譲位して院政を開始すると、一挙に衰退した。白河上皇、そして後白河上皇(法皇)がその時期に成したことは、こうして宙に浮いた荘園を自らの縁の寺に寄進させたり、相続拡散の心配のない自らの内親王(未婚の娘)の管理の下に置いて事実上自らの荘園としてしまったことであった。いわば、律令制度の守り神が律令破りに手を染めたようなものである。

後鳥羽上皇が治天の君として異例であったのは、数代で蓄積した経済力を背景に、自ら武力勢力を組成したことである。白河上皇の頃に既に「北面の武士」が置かれたが、後鳥羽上皇は加えて「西面の武士」を組織した。更に、在京御家人を懐柔して「私兵的な武人団」の厚みを増すことに注力した。世の流れを見て、朝廷も一定の自前の軍事力を充実すべきとの認識を高めたことは注目されてよい。

今、在京御家人の懐柔と書いたが、西国の守護の中には朝廷から官位を貰い、朝廷の意向を重く見る者もあり、また一方では、最初は身辺警備の士ほどの存在であったものが、徐々に存在感のある勢力に膨れていき、朝廷から国司に任ぜられるような者も出始めるに至った。鎌倉から見ても、朝廷から見ても、政治的に微妙な存在である。

治天の君たる後鳥羽上皇から見た権門構造では、鎌倉勢力は東国の軍事部門にすぎず、自らに対抗する主体とは認識されていなかった筈である。治天の君にとっては、寺社であろうが、公卿であろうが、武士であろうが、全て差配の対象である。鎌倉の新勢力はそれまでのところ自分から誼を通じて来てい

て害意はなさそうではあるものの、実朝暗殺で鎌倉への不信・疑念の思いが湧き、同時に軍事力の価値にも目醒めた上皇にしてみれば、この際自ら養ってきた周辺の武士団を頼みに、早めに鎌倉を牽制しておく気になったとしても無理はなかった。何と言っても治天の君として自信満々の上皇である。制裁・牽制を加える対象があれば、鎌倉の息がかかっているようにいまいが、各地の武士団に直接号令を発し、「官軍」として立ち向かわせれば良いだけである。実際に鎌倉討伐の院宣を発した際、少なくない西国の御家人がこれに同調・参陣している。近江、長門などの守護佐々木広綱、阿波、淡路の守護佐々木経高、播磨の守護後藤基清などのほか、三浦義村の弟で検非違使であった三浦胤義なども加わった。

ここで重要なのは、朝廷でのかかる動きを鎌倉側が事前に全く想定していなかったことと、追討の対象になったのは飽くまで義時個人であり、鎌倉の権力体制全体ではなかったということである。よく「幕府追討の院宣」などと言いつらわされるが、そもそも「幕府」というのは後世の呼称で、そのような文

主要事項歴史年表

保元元年(1156年)	保元の乱
平治元年(1159年)	平治の乱
平治二年(1160年)	頼朝 伊豆に流配
治承四年(1180年)	頼朝 拳兵
元暦二年(1185年)	平家滅亡
建久三年(1192年)	頼朝 征夷大将軍任官 後白河院死去
建久八年(1197年)	後鳥羽上皇 院政開始
建久十年(1199年)	頼朝死去 頼家二代「鎌倉殿」に
建仁三年(1203年)	阿野全成の乱 比企の乱 実朝三代「鎌倉殿」に
建仁三年(1204年)	頼家 修善寺にて惨殺 坊門信子 実朝御台所として東下
元久二年(1205年)	畠山重忠一族滅亡 牧氏事件
建暦三年(1213年)	和田合戦
建保五年(1217年)	公暁 鶴岡八幡宮別当就任
建保五年(1218年)	実朝 右大臣に任官
建保五年(1219年)	実朝暗殺 九条三実 次期将軍予定者として東下
承久三年(1221年)	承久の変
元仁元年(1224年)	義時死去
元仁二年(1225年)	政子死去
天福二年(1234年)	竹御所死去

31) 後三条天皇は、第71代の天皇で、宇多天皇以来170年ぶりに藤原氏を外戚としない天皇である。本文で紹介した荘園整理令をはじめ形骸化したつ両制度の立て直しに尽力し、「延久の善政」と讃えられた。

言はあり得ず、討伐の対象は大將の義時個人である。朝廷側としては弾劾して意向に沿うような人物を武門のトップに差し換えさえすればよく、鎌倉の武装勢力を一掃するまでの意図がある筈もなかった。しかし、ここに綾が生まれた。

そもそも鎌倉側では武士の中に院宣を読める者が少なく、そうと知ってかしらずつてか、御家人たちは有名な政子の大演説に感動し、院宣なるものは自分達の拠り所である鎌倉体制全体を否定する挑戦と受け止めて、反発・発奮し「一致団結」して討伐軍に立ち向かったとされている。そう書くと、勇ましく進軍したように聞こえるが、実態は義時の命で嫡男泰時らが少数で先駆けし、途中日和る御家人を徐々に糾合していったというのが実態であった。突然の宣旨でもあり、何と云っても、朝廷から討伐されるというのは、当時の御家人の価値観からすると破天荒の恐懼であった。彼らの周章狼狽、恐怖は容易に窺い知れる。しかし、進軍しながら「鎌倉が勝てば恩賞をどこそこに出すぞ」と説得して回った泰時らの判断は的確かつ正解であった³²⁾。逆にいうと、そうした具体的な論功行賞の提示を怠り、宣旨だけで事足りりとしたのは、朝廷側の過信であり、広報宣伝ミスでもあった。

しかし、而して朝廷軍を蹴散らして京の都に雪崩込み、容赦のない責任糾弾を貫き、畏れ多くも上皇3人を流刑に処し、次の天皇まで指名するという驚天動地の仕業を成し遂げた鎌倉勢は、気がつけば「歴史的ゲームチェンジャー」に成りおうせていた。以後、計画に連座した皇族、公卿、武士を処断しその所領を没収するとともに、西国にも守護地頭を配備して、文字通り武家の社会を確立したのはご承知の通りである³³⁾。

承久の争乱が「乱」なのか、「変」なのかの話題に戻りたい。以上の諸々の要素を総合的に見ると、冒頭の区分については、その「どちらでもない」と言わざるを得ないのではないかと思う。少なくとも、単なる権力闘争というレベルのものではなく、決して「変」ではなかろう。この争乱の前後の政治的構造の変化は紛れもなく「乱」に値するが、一方、争乱を惹起したのは権力者の筈の朝廷の側であり、また鎌倉側の方に最初から全国区の権力を奪取する気構えがあったのかどうかは甚だ疑問である。朝廷側では、放置しておくとそのうち自らを脅かす存在になりかねないとの見通しのもとに、権力者として予防的に制裁を仕掛けたのだが、その判断が凶と出て、足元を掬われるように権力崩壊した感がある。鎌倉側も、仕掛けられて受動的に対応しているうちに、権力篡奪、政治構造の大転換をなしてしまい、戦勝とともに主体的に新秩序に君臨したという印象がある。

さて、以上のような論述には、例えば冒頭に引用した旧稿の趣や解釈とは違う印象があるかもしれない。しかし、頼家の遺児で政子の孫である竹御所と政子との掛け合いのプロットはそれなりの趣向であると思っている。歴史を紐解くと言うことは、今に生きる者が当時のどの人の視点でモノを眺めるかによって決まる。また、眺める縁とする資料の性格、背景をどのように参酌するかにも大きく左右される。公式文書が全て権力者の都合の良いように書かれて信用できないとまでいうつもりはないが、記録のないところに思いを巡らす一方、書かれた記録の隙間や行間を読むことも歴史を楽しむ大事な術である。歴史とは、過去にあるものではなく、今を生きる我々の中にあるものであるからである。

32)「頼朝公の恩は山よりも高く、海よりも深い」という政子の督励演説はつとに有名であるが、本文でも述べたように院宣に接した御家人の動揺は激しく、その場で「エイエイ、オー」になったわけではない。むしろ守りを固め討伐軍を鎌倉で迎え撃つ策さえ考慮された。しかし、京出身で公卿のメンタリティに通じた文官の大江広元などが、「討伐軍は、こちらは恐れ入ってまさか打って出てくるとは想定していないはず。防禦では御家人たちの士気も上がらない。機先を制して攻勢に出るべし。例え少数でも毅然と出陣する方が勝機がある。」と説き、泰時、朝時兄弟、時房が総帥義時から託されて出陣したというのが実態。それぞれ東海道、北陸道、東山道の三手に分かれて進軍した。その積極策と恩賞明示の作戦が功を奏し、道々の勢力を糾合し、大挙して京に攻め上った。木曾川、宇治川の朝廷側防衛線を突破して、鎌倉を出て1か月足らずで京を制圧した。

33)「近臣が勝手に進めた」との朝廷側の弁明は聞き入れられず、後鳥羽上皇は隠岐島へ、順徳上皇は佐渡島に、そして内部で計画に反対した土御門上皇も自ら望んで土佐国にそれぞれ流された。本文でも紹介した將軍候補にもなった雅成親王、頼仁親王も但馬国、備前国に流された。在位70日余りの仲恭天皇は廃され、新たに後堀川天皇が即位した。計画に加担した公卿、武士も容赦なく処刑、流罪、解官に処せられた。武士の側からすると、3人の上皇を流刑に処すというのも破天荒な仕業であるが、天皇を退位させその後継天皇を「指名」という差配までやってのけ、まさに「時代が変わった」のであった。

しかし、全体を仕切った義時は自らのなしたあまりの壮挙(暴挙?)に恐れ慄(おそれおの)き、屋敷への落雷を朝廷の祟りと恐れるなど心穏やかでない日々を送ったとされる。後世に残る得宗執権北条氏の地位確立の大功労者であるが、元仁元年(1224年)に急死。死因については衝心脚気と伝えられるが、62歳での急な死去であり憶測を呼んだ。